



東京YMCA

2016 9 月号

発行所 公益財団法人東京YMCA 発行人 廣田光司
135-0016 東京都江東区東陽2-2-20 電話 03-3615-5562

URL <http://tokyo.ymca.or.jp>

東京YMCAの使命

東京YMCAは、イエス・キリストによって示された愛と奉仕の精神にもとづいて、青少年の精神、知性、身体の全人的成長を願い、地域社会に奉仕し、公正で平和な世界をつくるための運動を展開する。

熊本大地震 支援活動続く

We build strong kids, strong families, strong communities. YMCAは、たくましい子どもたち、家族の強い絆、支えあう地域社会を築きます。

熊本大地震発生から5ヶ月が経ちますが、熊本YMCAが運営している2カ所の避難所では依然として約500人が避難生活を送っています。長期化する不安定な生活の中で、子どもたちの心のケア、高齢者のサポート、仮設住宅への移行など、新たな支援が必要となっており、現地スタッフやボランティアは日々アイディアを駆使し、懸命な支援活動を継続しています。

東京YMCAもスタッフや学生を派遣して応援しているほか、チャリティコンサート(4面)などにより募金活動に力を入れています。

震災の爪跡、保育園にも

芝浦学童クラブ 根本 夕葵



↑今もなお、家屋や道端など至る所にブルーシートがかけられている

熊本大地震から3ヶ月が経った7月10〜16日、熊本YMCAの保育支援のため熊本県阿蘇市に入りました。街はまだ震災の爪跡が残された状態。家屋にはブルーシートがかかれ、崩れた山々が広がっていました。普段学童クラブで勤務している私は、保育士として熊本YMCA尾ヶ石保育園で保育補助を行いました。東京から来た私を子どもたちは笑顔で迎

えてくれましたが、いたるところに震災がもたらした多大な影響を感じさせられました。自宅が被災し、未だに民泊をせざるを得ない子どもや保育士がいること。いわゆる「地震っこ」で遊ぶ5歳児の姿。傾いたままの園庭で保育を行っている現状など。月日が経った今でもなお、皆さんの日常生活と心の中には震災の爪跡が残されていると感じました。私は限

られた日数でしたが、現地の状況を知ること、保育士をサポートすること、そして子どもたちの気持ちを受け止めることに務めました。尾ヶ石保育園園長は、「親の不安は子どもに移る。園では普段どおりの生活を心がけ、また遊びの中で心を自由に表現させる『プレイセラピー』を行っているが、地震によってもともと多動の傾向の子はより多動になるなどの影響がみられる」とおっしゃっていました。被災地復興は始まったばかりです。ボランティア

アや募金活動はもう一度くことが大切だと感じ、熊本を忘れず、応援しました。する気持ちを持ち続けて

専門学校生が避難所等支援

国際ホテル専門学校 三浦 壮一郎

7月10〜15日、東京YMCA国際ホテル専門学校より13名、社会体育・所運営サポートや大雨による農業被害の支援活動を行ないました。学生が熊本支援ワークキャンプに参加。阿蘇YM

然として配給食が菓子パン、コンビニのおにぎりや弁当という状況で、避難者の方々の心身の疲労に心が痛みました。御船町では6月初旬に周辺の小規模避難所が閉鎖され、YMCAが運営する避難所に集約されたため、熊本YMCAのスタッフは新たな避難者を迎えるよう懸命にサポートしていました。学生たちは、日ごろ接客などを学



↑避難所で配給食を配る学生



↑支援活動をした学生たち

【募金のお願】引き続き募金への協力をお願いいたします。(振込先) みずほ銀行 神田支店 普通1123669 公益財団法人東京YMCA *お名前の後に「クマモト」とお書き下さい

「東京YMCA2016〜2018年中期計画」には、「ユースリーダーとして活躍した学生とのつながりを維持するために、YMCAからの定期的な発信をフェイスブック等のSNSを用いて行う」とある。早速、このシステムが機能されることを望む▼日本YMCA同盟名誉主事の故永井三郎は、「YMCAは、You Must Come Again. (またいらっしやう)の略でもある」と語っておられたことが思いだされる。

↑熊本YMCAの避難所でいけばなのパフォーマンスをする假屋崎さん



華道家 假屋崎省吾さんも熊本支援 熊本でいけばな、東京でピアノコンサート

テレビなどでもお馴染みの華道家・假屋崎省吾(かりやき しょうご)さんが6月、「避難所の方々を励ましたい」と、東京ワイズメンズクラブの進藤重光前会長の紹介で熊本YMCAの2カ所の避難所を訪れ、いけばなのパフォーマンスを披露。すばらしい作品を次々と作り上げ、避難所の体育館に華やかなひと時をプレゼントくださいました。

した。また假屋崎さんはYMCAの支援活動に大変共感され、ご知友等から寄せられた募金40万円を寄付した上、東京の自宅サロンでも7月24日、チャリティーコンサートを開催くださいました。コンサートでは、ピアノの須江太郎さん、駐日フランス経済公使のピエール・ムルヴァさんと共にご自身もピアノを演奏。YMCAスタッフによるアピールの時間も頂戴し、10万6876円を募金いただきました。

= お知らせ =

東陽町センター移転計画の一部変更について

公益財団法人東京YMCAは2018年3月をもって、東陽町センター(江東区東陽2-2-20)より移転する計画でしたが、現会館の1・2階部分を改めて賃借し、活動を継続することにいたしました。

これに伴い、インターナショナルスクール、東陽町語学教育センター、東陽町におけるコミュニティ活動、および社会体育・保育専門学校、にほんご学院などの一部教室・実習施設は、引き続き東陽町センターを使用します。なお本部機能は計画通り新宿区西早稲田の日本キリスト教会館へ移転します。

東陽町ウエルネスセンターと東陽町YMCA保育園は当初の計画通り2017年度をもって事業を終了いたします。なおウエルネスセンターが運営している3階から7階は2018年度より、フィットネスクラブ「ゴールドジム」が運営します。現利用者の皆様が新フィットネスクラブを安心してご利用いただけるよう、円滑な引き継ぎを進める予定です。

東京YMCA東陽町センターは1988年の開設以来、多くの会員や利用者の皆様そして地域の方々に支えられてきました。今後さらにコミュニティのニーズに応える働きができるよう、あらためて地域の声に耳を傾け、「新生東陽町センター」を目指して発展してまいります。これからどうぞご理解・ご支援を賜りますようお願い申し上げます。

代表理事／総主事 廣田光司

赤△三角

子どもたちの活きるエネルギーや夢を育もうと、キャンプやグループ活動などに青春の情熱をたぎらせ、共通の体験を持ったかつてのユースボランティアリーダー仲間や担当スタッフとの再会は、青春に掛けたひとときの価値を当事者に蘇らせてくれる▼かつてのYMCA立川センターにかかわったリーダーたち35人が、この7月に再会を喜び合う交流会を設けた。これは去る4月に開催された「東京YMCA西東京コミュニティセンター60周年記念会」(本紙5月号掲載)で再会した立川センターのリーダーたちが、「今度は立川の関係者と呼び掛けて集まろうよ!」と意気投合し実現したもの▼

(学校法人東京YMCA 学院評議員 大村洋水)

利用者100万人

江東区児童・高齢者総合施設「グランチャ東雲」



江東区児童・高齢者総合施設「グランチャ東雲」が8月8日、2011年4月のオープンから利用者累計100万人を達成。江東区関係者も訪れる中、100万人目となった矢澤恵子さんに花束が贈呈されました。

「グランチャ東雲」は、開設当初から東京YMCAが指定管理者として運営している施設で、プール、運動スペース、調理室、工作室、ホールなどを備え、高齢者の健康と生きがいづくりを目的とした多数のプログラムを提供しています。子ども用のスペースもあり、高齢者と親子連れの“三世代交流”も行なわれ、1日約550人、年間20万人が利用しています。

100万人目となった矢澤さんは、日ごろからエクササイズや民謡など多数の活動に参加している方で、「グランチャ東雲のおかげで健康が保たれています」と感謝の言葉をいただきました。

「グランチャ東雲」はこれからも、利用する方々がより活き活きと充実した日々を送っていただけるように、そしてまた地域の方々の「ふるさと」となれるよう願って運営してまいります。

(グランチャ東雲館長 口原恵美子)

東日本大震災 復興支援活動

6年目の夏

■ グループホームでレクリエーション

医療福祉専門学校

医療福祉専門学校の「第11回東日本大震災復興ワークキャンプ」を8月18日から21日にかけて石巻で行いました。宿泊はYMCA石巻支援センター。石巻広域ワイズメンズクラブの皆様が準備くださいました。

ワークでは、認知症高齢者のグループホーム「長寿の郷 広渕（ひろぶち）」を訪問。このホームは津波によって建物が流されてしまったにもかかわらず、職員が利用者を背負い、また山道を車椅子で登ったりなどして避難し、全員が生き延びることが出来たというエピソードのあるホームです。

学生たちは、主としてレクリエーションを担当しましたが、利用者の皆様の積極的な関わりでとても楽しい時間を過ごさせていただきました。お別れのときには涙が茫漠と流れ、時間を大きく超過してしまいました。

その後、仙台YMCAの村井伸夫総主事が被災地を案内してくださり、被害の大きさ、復興の進み具合などを学びました。復興完了にはまだ年月を要する状況でしたが、村井総主事は学生たちに「絶望はどんなに大きくても決して長続きしない」と、心に残る言葉をくださいました。

(医療福祉専門学校校長 八尾 勝)

■ 石巻小学校で水泳指導

社会体育・保育専門学校

被災地の子どもたちを応援しようと、社会体育・保育専門学校は震災直後から毎夏、石巻小学校でプール指導を行なっています。6年目となった今年は、7月25～27日に6人、7月27～29日に5人の学生が指導にあたりました。全日程天候に恵まれ、午前午後2時間ずつ予定どおりに実施することができ、1日約150人を超える小学生たちが水泳を楽しみました。学生たちも日ごろの学習の成果を発揮することができ、また小学生たちと交流が持て、とても充実したボランティア体験となりました。

石巻小学校は合併により生徒数が増え、また昨冬にはプールも改装されました。2011年には1年生だった子ども6年生になります。毎年欠かさずに参加してくれる子どもたちが、町の復興と共に成長していく姿に、私たちも励まされる思いがしました。

(社会体育・保育専門学校 佐治克彦)



初めてビッグカヌーに乗ったキャンパーも多く、漕ぎ方を習って楽しみました。



野外炊飯（カレー・バームクーヘン作り）にもチャレンジ。

北京の親子10人がキャンプ体験

北京・東京YMCAパートナーシップ山中湖キャンプ

7月18～21日、北京YMCAの水泳教室に通う子どもとその保護者など11人が来日し、東京YMCA山中湖センターにて

3泊4日のキャンブ生活を過ごしました。中国のYMCAでは日本と違ってキャンブが行なわれていないため、こ

のプログラムは、中国の子どもたちにグループ活動や自然に親しむ機会を提供すること、また、キャンブ生活を通じて中国

と日本のキャンパーが交流と相互理解を深めることを目的に実施されました。キャンパーたちは、開

村式・朝の集い・ハイキング・ビッグカヌー・キャンプファイヤー・デューティー（掃除）などキャンプの活動一つ一つに興味深そうに体験。また、子どもたちには学生リーダーが寄り添い、子どもや保護者の方々もそれぞれに役割を担う中で、次第にキャンパー同士の結束力が高まってくる様子も見えてきました。「言葉の壁」はありましたが、リーダーとして参加した東京YMCAにほんご学院の留学生が通訳としても活躍してくれました。

「キャンプを通じて子どもの新しい表情にたくさん出会った」（保護者）、「リーダーとずっと一緒にいたいと思う」（子ども）、「気付いたら子どもたちと意思疎通できるようになっていました。子どもたちも少しずつ自分を理解しようと歩み寄ってくれたからだと思う」（日本人リーダー）など、キャンプから生まれた思いや発見はさまざまです。

『WHO ウォーキング・ホリデー・荻窪 が勧める

ウォーキングコース197』

月に1回東京近郊を歩く「ウォーキング・ホリデー・荻窪（WHO）」が開催200回を迎え、これまでに歩いたコース集を刊行した。

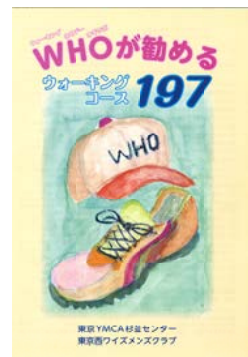
WHOは1997年11月、杉並センターと東京西ワイズメンズクラブが健康作りや交流を目的に始めた会である。「会員によるプログラム」をモットーとし、翌98年に杉並センターが閉館してからも、すべて会員だけで企画・運営している。

「197」というのは、歩いたコースの数。原則として同じコースは歩かないが、天候などの事情で2度歩いたコースもあり、197となった。コースの設定をしたのは主に、WHOの発起人の一人である吉田明弘さん。3カ月前に候補を決めて下見をし、交通量、疲労度、景色、話題性などをチェック。納得のいくコースができるまで、たいてい2～3度は歩くという。「林芙美子が愛した落合」「一味ちがう阿佐ヶ谷・高円寺」など、各コースにはテーマが設けられ、それに沿った見どころを調べあげて当日の参加者に配布している。都内の馴染みのコースにも、「一カ所くらいは“へえ、知らなかった”と言われる見どころも加えたい」と吉田さん。その心意気はどのコースを見ても伝わってくる。

参加者は口コミで増え、今は毎回40～50人が参加。延べ参加者は6600人にのぼる。気軽に参加できるよう予約は不要。会費は1回300円。1日の歩行距離は10～15km。盛夏の8月はお休みとする。こんなルールも長続きの秘訣のようだ。

「あとがき」には、WHOの小史がまとめられている他、「集団迷子」などのエピソードもちりばめられていて味わい深い。会員だけで運営してきた苦労は察して余りあるが、「だれも“苦労した。”とは言わない」という。多くの方の力でこの会が継続されていること、またこうした会員活動によって今も「杉並センター」の看板が存続されていることに、心から敬意を表したい。

(広報室)



A4版64頁。

執筆・編集：吉田明弘

イラスト：大野貞次

頒布価格：500円

お問合せ：

東京YMCA総務部

tel. 03-3615-5562

■全国Y M C A 少年少女水泳大会 広島に折り鶴も寄贈



広島市総合屋内プールで8月10～11日、『第40回全国Y M C A 少年少女水泳大会』が開催され、全国から188人の小中学生が参加しました。東京Y M C Aからは小学2年生から中学2年生まで7人の選手が出場。フリーリレーとメドレーリレーで4位に入賞するなど大活躍しました。

初めて全国大会に出場した選手もいましたが、大会前に特別練習を行なって1日に数キロメートルを泳ぎ込み、それぞれベストタイムを更新したりメダルを獲得するなど、力を発揮することができました。

また今年は広島で開催したため、子どもたちは大会前に折り鶴を用意し、平和記念公園に贈りました。練習の前後などに皆で折った鶴は、東京Y M C Aだけでも600ほどになりました。1泊2日の大会でしたが、貴重な体験ができました。(東陽町ウエルネスセンター 澤村奈緒)

■江東チーム、全国Y M C A サッカー大会で準優勝

「全国Y M C A サッカー大会」が8月20～22日、静岡県御殿場市の時之栖（ときのみか）で行われ、全国から約300人の小学生が参加。東京Y M C Aからは江東センターの32人が出場し、高学年チームは準優勝、中学年チームは3位に入賞と、過去最高の結果を収めることができました。また、大会前に骨折してしまった6年生も“皆と一緒に参加したい”と同行したところ、チームを応援したりサポートする姿勢が評価され「フェアプレー賞」を受賞しました。



特に6年生は、幼少のころから一緒に練習を積み重ね、試合も多数経験してきました。そこで培われたチームワークの良さが、今回の好成績につながったと思います。大会後、富士山にかかった虹を見て「ぼくたちの汗が虹になったんだ」とつぶやいた子がいました。子どもたちの頑張り、心から拍手を送ります。(江東センター 大原真之介)



おかげさまで益金は約60万円。地域の会員活動ほかY M C Aの公益活動のために用いさせていただきます。

オール東京会員「夏まつり」学生ボランティアが活躍

年に一度、東京Y M C Aの全センターの会員が集まって開催する「東京Y M C A夏まつり」が8月27日、東陽町センターで行なわれました。台風が接近し、曇り空の下ではありましたが、会場は例年と変わらず大賑わい。年々腕に磨きがかかる模擬店にも、ヨーヨー



聖路加国際病院・東京Y M C A ぐうぐうキャンプ

治療中の子どもたちにも笑顔

「入院や手術など大変な治療をしている子どもたちとその家族に、笑顔になれる楽しい思い出を作りたい」。聖路加国際病院形成外科医長・松井瑞子医師のこんな思いから始まった「聖路加国際病院・東京Y M C A ぐうぐうキャンプ」が7月16～18日、東京Y M C A 妙高高原ロッジで開催され、幼児から高校生まで20人が参加しました。

6年目を迎えた今年もまた、ビザ・ワールドフット・ジャパン株式会社が協賛くださり、聖路加国際病院の医師や看護師、保育士、また東京と神戸Y M C Aのボランティアリーダーなど30人近くの手厚いスタッフ体制で行なわれました。毎年楽しみにしている子どもたちも増え、参加継続率は90%を越えます。初回から参加している子が高校生となり、バレーボールの準備や生活グループでの世話役など、キャンプ運営の担い手として活躍する姿も見られるようになりました。また、ヨットの操船スキルを学んだり、高校生ならではの新たなチャレンジをする場面もありました。今後も、年下の子どものための目標となるよう成長をして欲しいと願っています。



「平和の文化をつくるために」

毎月一回、昼食をともにしながら様々な分野の卓話を聞く「午餐会」。8月8日は「平和」をテーマに学ぶことが恒例になっており、今年はステイイーブン・リーパー氏講演

いっしょに予定しています。これからも子どもたちの笑顔のために諸団体が協働し、継続できよう願っています。(高尾の森わくわくビル 佐藤信也)

るなど、核兵器の廃絶、平和文化の創設のために精力的な活動を続けています。午餐会では、戦争によって決して世界は守れないこと、経済、企業の利益、個人のエゴでなく、人間愛をもって協力しなければ人類の存続は危ういと語られました。そして世界にネットワークを持つY M C Aこそ、平和意識を高め、この危機的状況を解決していくための動きを担ってほしいと熱いメッセージをいただきました。この時代を生きる私たちの責任を問う直す午餐会となりました。(賛助会事務局 戸坂昇子)



シリーズ 資料室の窓から(95) 資料室、古いもの三つ 齊藤 實 本会元副総主事

東京Y M C A資料室の景色は、やがて一変する。西早稲田に移転するからである。そこで資料室が所蔵する古いもの三つを挙げたい。

一、一番古いのは『六合雑誌』だ。「りくごうざつし」と読む。1880年10月創刊の東京Y M C A機関誌である。「六合」は宇宙を指す。天下の形勢を見つめながら「今」を生きて、という気構えが伝わる。「世界を見つめ、地域に生きる」と標語を掲げた創立百周年の我われの志を先取りした先達に、敬意を表したい。当時のY M C A会員は、よく読み、よく語り合う青年たちであった。メールのやり取りは程々にして、文章で思いを伝える修練を重ねたい。紙の

資料は大事である。その記事には、しっかりと時代を伝える描写が欲しい。現場の動きを記録し、大事なメッセージとして継承する。その手立ては、現役職員の手にならなければならない。東京Y M C A 150年の日に、過去を踏まえた前進を喜び合いたい。

二、番目に古いのは、初代会館の礎石である。「1893年・明治26年」の文字が刻まれたこの石に触れてほしい。東京Y M C A会員の、身近な文化遺産なのだ。天下に名を轟かした「神田の青年会館」の果たした役割を学び直すために。『《資料室の窓から》

「ほら、見な、あんな雲になりてえんだよ」(男はつらいよ、柴又慕情より)

妹のさくらに「お兄ちゃんは何で旅に出るの?」と聞かれて答えた寅さんのセリフです。1973年にジョージ秋山という漫画家が「浮浪雲(はぐれぐも)」という漫画を描きました。大ヒット作品なので知っている人は多いと思います。江戸時代の遊んで暮らす自由人を描いたもので「はぐれ」とは仲間はずれとか一人ぼっちという意味ではありますが、作品では自由

を表現しています。6月28日の日経新聞で「日立製作所が社員の幸福向上に有効なアドバイスを人工知能(AI)が個別に配信する実験を始めた」とありました。蓄積した

れと思つ人がいると思います。私は後者です。先日、アマゾン(ネット)で本を買いました。次の機会にネットを開けてみると「あなたにはこの本がおすすめです」と、私の嗜好に近い本が紹介されていました。見張られていうようで気味が悪いと思いました。現代社会では、特定秘密保護法、マイナンバー、制度、街角の防犯カメラ、ビックデータなど

ど、なんと私たちの行動を監視する要素が多いことかと思ひます。KYは「空気読めない」と読むのだそうです。空気を読んで皆に合わせるのが現代の賢い生き方なのでしょうか。何か事が起こるとマスメディアは一斉に同じ方向で同じ発信をします。今この国を支配しているのは「空気」です。「あんな雲になりてえ」などと言っていると全体から「はぐれ」てしまいうです。が、一斉に同じ方向を向かない生き方もあるのです。(総主事 廣田光司)